
生存率 1 / 2 のサバイバル

パリジェンヌ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生存率1/2のサバイバル

【Nコード】

N3824Q

【作者名】

パリジェンヌ

【あらすじ】

白鳩高校生徒、薄井直哉と中村希、中島田熊、直木太志の4人組は生存率1/2の勝つか負けるか、生きるか死ぬかのサバイバルに明け暮れていた・・・はたして生き残るのは誰なのか・・・

「おい、アレやろうぜ」

クラス一のデブ、直木太志が言った

「俺今日あんま金持っていないんだが」

日ごろからクールを気取っている天パ野郎、中村希が答えた

「まあ僕はどうせまた勝つかから別にいいけど」

希の背後からオタク野郎、中島田熊が割り込む

「よし、薄井、お前は？」

直木が俺に尋ねた

「ふん、いいだろう」

俺の名は薄井直哉

長身に爽やか短髪、元野球部エースの男子高校生だ

おっと、そんなことよりも「アレ」とやらの説明をしないとな

まあ簡単に説明するとパシリゲームみたいなものさ

ジャンケンをして一番負けのやつが他の奴の注文したものを自腹で
買いに行く

悪魔のようなゲームだがこいつらはギャンブルに賭ける青春も悪く
ないって輩ばかりなのさ

言っておくが俺と田熊は一度も負けたことがない

つまりは勝率100パーセントってわけだ

希もなかなかの強運の持ち主らしく数えるほどしか負けたことがない
特筆すべきなのは太志だ

コイツが勝った時は食費が洒落にならんから地獄をみるが大体この
勝負で負けるのはいつもコイツなのだ

自分の食費を浮かせるために言いだすわけだがいつも負けてばかり
で結局は金銭的な面から自分の食事を減らしている

ダイエツトとか言っているがただのアホだと俺は確信している
「さーて、始めるか」

太志が席を立ち俺たちもそれに続き立ち上がる

全員が立ち上がりやる気が感じられたところで希が言った

「んじゃいくぞ」

それぞれが構える

「じゃんけんぽん！」

田熊の掛け声と同時に俺たちは一斉にそれぞれの拳を振った

結果は・・・

太志がグー

希がグー

田熊がパー

俺がグー

「やったね」

田熊が嬉しそうにメモを取り出し注文を書きつける

「まーたお前は勝つのか」

呆れ顔の太志が言った

「次は俺さ」

希がしゃしゃる

「ふん、勝負はこれからだ」

俺は相手の二人を睨みつけると掛け声をかけた

「じゃんけんぽん！」

俺たちは優越感に浸っている田熊を尻目に拳を振った

結果は・・・

太志がグー

希がチヨキ

俺がチヨキ

「いよっしゃあああああああああああ！！！！！！」

太志がガッツポーズを掲げ叫ぶ

クラスの他の奴の視線が痛い

「んじゃこれよろしく」

太志がメモを取り出す

「おいおい何だその厚さは・・・」

希の顔が引きつる

「何って注文のメモだけど」

太志が当たり前の返答をする

「ほら早く早く」

田熊が次の勝負をせかす

「オーケー、やってやろうじゃん」

希の目がギラリと輝く

「先に言っておく、俺の注文はビッグマーベラスカツサンドとジパング風フレンチフライのサイズLにミルクティーダーズリンセレクションボリウム3だ」

俺は希に注文を突き付けた

「俺がそれを聞く必要はない」

希はそういうと構えた

「いくぞ!!」

俺たちはそう叫ぶと振りかぶった

「じゃんけんぽん!!」

俺と希は同時に拳を相手の前に突き付けた

結果は・・・

希がパー

俺がパー

あいこだ

「ハア・・・ハア・・・やるじゃん」

あまりの緊迫感に息を切らした希が言った

「ふん、前のお前ではないようだな」

俺も思わず片膝をつく

「やっぱカレーだけじゃなくてカレーうどんも頼もう」

それを尻目に太志が注文を書き足す

「おいおい、一体いくらになるんだよ」

田熊も呆れ顔だ

ん？

ふと尻ポケットに手をやった俺は違和感を覚えた

そこにはあるはずの物がないのだ

普段から鞆にはしまわないからここにあるはずなのだが

そう言えば昨日放課後にコンビニで菓子を買ったな

そのあとは直帰してすぐに寝たはずだが

はっ！

そう言えば菓子買ったときに財布をそのまま菓子を入れてもらった
ビニール袋の中に一緒に入れたんだ！

そしてその菓子は今も自宅の机の上だ

これはまずい

今の俺は一文無しというわけか・・・

これがバレたら何を言われるか・・・

それにいまさら引くことも出来ない・・・

どうする・・・俺

「どうした？手が震えているようだが」

希が笑みを浮かべている

「武者震いってやつさ」

そう答えた俺は思った

解決法は一つ

勝てばいい

それ以外の選択肢は俺にはない

勝利以外の選択肢は俺には似合わない

ここは少し慎重に行かせてもらおうとしよう

希の一手目はグーだ

そして二手目はチョキ

三手目がパー

偶然にも俺が出した手と全てかぶっている

ジャンケンの手の順番と言えば童謡でも歌われているようにグーチ
ヨキパーが一般的な順番だろう

希はそれにあやかっているのだろうか

少なくとも俺はまったくの偶然でこの手になったわけだが
ふむ、探りを入れてみるか

「お前・・・次何だす？」

「は？」

俺の問いに希は驚いたようだった

「んーじゃあグー」

希は疑うような目で俺を見据えると答えた
やはりな

希は順番で手を出しているようだ

そして次もグーを出すと宣言した

だが、これは奴が正直者だったらの話だ
騙し騙され、死ぬか生きるかのこの世界

それはまずないだろう

やつはチヨキかパーを出す

そして先ほどあいこになったであろうパーを再び出す可能性は低い
つまり俺がグーを出せばチヨキを出した希に勝てるわけだ

だがパーを出される可能性がゼロというわけではない

そこで俺は奴がパーを出す可能性をゼロにする一言を言っただ

「天パだからパー出すかと思っただわ、天パのパー」

俺は挑発するように希に言った

「寝言は勝つてからいいな」

少し勘に触ったのかぶつきらばうな口調になった希が言った

「んじゃあ、いくか？」

俺たちは再び構えた

「じゃんけん・・・ぽん！！」

俺は野球のボールを投げる時のように手首のスナップを利かせ華麗
にグーを出した

結果は・・・

希がグー

俺がグー

再びあいこだ

な・・・なんだと・・・？

こいつ・・・俺の予想の範囲を超えてやがる・・・

まさかここで馬鹿正直にグーを出してくるとは・・・

この俺としたことが裏を読まれたか・・・

「ふう、あぶねー」

希が額の汗をぬぐう

「はやくしろよ！腹減ってんだよ！」

太志が叫ぶ

「昼休みはそう長くないよ」

田熊もしびれを切らしているようだ

落ち着け、落ち着くんだ薄井直哉

周りからの雑念に惑わされるな

俺は深呼吸をすると目を閉じ再び考えた

じゃんけんの勝率は二分の一だ

あいこはカウントされないとして、勝つか負けるか、それだけだ

奴は・・・希はグー、チョキ、パー、グーの順番で出している

ほぼ確実に奴は順番で手を出しているに違いないのだ

次はチョキを出すだろう

俺が次にグーをだせばそれで勝ちだ

確率で言くと

グーが20パーセント

チョキが60パーセント

パーが20パーセント

といったところだろう

だがどうだ

先ほどのように俺の予想を反した行動をとることだできるのだ、こいつは

さっきの勝負、俺の挑発は成功したといっているだろう

再び奴を挑発すればパーを出す可能性は皆無になる

しかしそのパーの可能性がチヨキにプラスされるのかそれともグーにプラスされるのか何パーセントプラスされるのか俺にはわからない
そして考えておかなければならないのはもしかしたら二度目は通用しないかもということだ

勝敗的に考えてみると奴はグーを最もだしそのすべてであいいこになっている

このことは奴も考えているはずだ
奴にとつてのグーはあいこの手だ

この手を再び出してくるとは考えにくい

よってグーを出す可能性は順番と合わせり最も低くなるだろう

そして俺は今のところやつと全ての手がかぶっている

つまりグーは俺にとつてもあいこの手なわけだ

奴がもしこのこれらのことを理解しているならばグーでは来ないはずだしチヨキかパーを出すはずだ

俺は奴の裏に行くがその裏に奴は行った

そこで俺は慎重に負けがない手を出すことにした

ズバリチヨキ！

順番的に奴が最も出す確率の高いチヨキで来たとしてもその次に確率の高いパーで来たとしても俺の負けはない

くくく・・・

この勝負貰った！

俺は溢れ出る笑みを必死でこらえながら希を見た

奴は腕を組みながら悩んでいるようだった

そうだな悩め！

チヨキかパーを出すかだな！

お前は俺の手の中で踊ってるのさ！

希は俺の視線に気づいたのかこちらを見るといった

「決めたぜ」

「ほう」

俺は奴に余裕すら感じられ少しばかりの驚きを感じた

しかし、それが大きければ大きいほど奴の落胆も大きくなるはずだ
それを見るのが楽しみだぜ

「すう・・・」

俺は息を吸いこんだ

「いくぞ!!!」

そして拳を天に向け叫んだ

「くるああああああ!!!」

希はそう叫ぶと飛び上がった

「「じゃん!」」

二人の視線がぶつかる!

その間には誰も侵入することはできない!

そこはまるで他の全てが無になったような二人だけの空間だった!

「「けん!!!」」

希が拳を振り上げ俺は力の限り振りかぶる!

これで・・・この勝負で勝敗が決まる!

俺はそう確信し希の目からも奴がそう確信したことが感じ取れた!

そして・・・時はきた!

「「ぽんつつつ!!!」」

希が着地と同時に拳を振り下ろす!

それに呼応するように俺の拳がかざされた!

結果は・・・

希がグー

俺がチョキ

負けた

「なっあっ・・・」

俺は目の前の光景が信じられなかった

思わず膝から崩れ落ちる

「よっしゃーじゃあ俺はもずくラーメンな」

希が生き生きとメモに注文を書きつける

「なぜ・・・んだ・・・」

「ん？」

3人が振り向く

「なぜなんだ!!!」

俺は力の限り叫んでいた

教室中の視線が天を仰ぐ俺に集中する

「お前グーチヨキパーの順番で出してたろ、まじわかりやしー」

そういつて希は笑った

俺は・・・燃え尽きた

「なるべく早くなー」

「1つでも忘れたら承知しねーぞ早く行け!」

「伸びる前に頼むぜ」

俺は3人からの声に背中を押され教室を出た

そしてそのまま帰宅した俺への扱いが翌日から見るも無残な物になったことは言うまでもない

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3824q/>

生存率 1 / 2 のサバイバル

2011年1月28日09時35分発行